



国際サウナ協会 会長
マーケッタ フォーセル(フィンランド)

古代ギリシャから現代フィンランドまでの温浴文化と女性 —古代の入浴文化—ヨーロッパの入浴の伝統—フィンランドのサウナと女性

入浴・温浴文化は、人間の歴史の初期から、多種多様な形式・形態で存在しました。様々な民族の伝統には、宗教的慣習、病気の治癒、儀式、運動、リラクゼーション、社会化と密接に関連し結合した多くの様式の入浴習慣がありました。

入浴の慣習は紀元前300年頃ギリシャからローマに広まりました。相対的に大きな浴場バルネア(※1)は、例えばイタリアのポンペイで発見されました。これらは、明確に分けられた2つのセクションから成っており、大きい方は男性用に、小さい方は女性用となっていました。研究によると、“ギリシャ浴場”はある時期流行しましたが、ローマ浴場の確立された一部—テルマエ(※2)ではありませんでした。これらのテルマエは、文化とエンターテインメントのすべて様式を表現する大規模な保養施設になりました。規則や規制が、次々に発布されました。ローマ浴場は“肉体の大会堂”へと変化し、そして、ローマ帝国の衰退に伴い、テルマエは破壊されました。

イスラム諸国では、ギリシャ及びローマの入浴文化はトルコ式風呂—ハمامへと発展しました。それ以前でさえ、イスラム教徒は宗教的規律に従って入浴をしていました。

13世紀にパリで“特殊入浴係員”組合が設立されました。1399年の新しい規則は男性及び女性入浴係員に関するもので、彼らはそれにふさわしい生活を送らなければなりませんでしたが、誠実できちんとした言葉使いをしなくてはなりませんでした。

バツサーノ・ダ・ザラは1520年代に飾った文体的方法で女性用のハمام(公衆浴場)を記述しています。ハمامは女性が他の女性との交流を営む高尚な社会的場所です。裸を猥褻或いは下品さとしばしば連想する西洋の人々は、エロチックな響きを描写に加える傾向があり、時々それを正当化することがあります。

中世の入浴文化の衰退と終焉は、16世紀前半に中央及び西ヨーロッパの都市で始まり、そしてその慣習が消えて行くのに、約200年掛かりました。しかしながら、サウナは小さな僻地の町、アルプスの谷間の村、遠い北部地域、そしてロシアでその地位を固守しました。通常、浴場を廃業する理由は、道徳的ならびに健康問題と木材の消費の問題でした。

フィンランドのサウナは、今も現存し適合できる文化の一部です。

以前、サウナは生活の中心であり、そして、女性はその女主人でした。サウナは、将来の主人、女主人、農



女性達が氷の中で冷水浴をしている風景



スモークサウナの中のヴィヒタ

場労働者やメイドが生まれた場所でした。いろいろ不思議な儀式が、妊娠の最後の日に在りました。例えば、出産が早くなりそうな場合、稲妻で割られた木でサウナを加熱しました。

過去数世紀、フィンランドの女性の人生は苛酷で、幼児期ののんきな数年の後は、仕事でいっぱいでした。出産後の期間は、女性が休むことができ、ゆっくりすることが出来る唯一の時期でした。

お母さん達は、数週間サウナの平穏を楽しみました。

民俗学や文献には、非常に多くのサウナに関したまじないや魔法の記述があります。

通常、女性は中心的な俳優でした。

女性は、日常的な仕事として、また休日の間も、サウナの加熱に携わりました。

多くの信念は、クリスマスサウナに関連があります。結局、クリスマスはキリスト教の国で最も重要な神聖な季節行事で、多くの神話的連想を伴う宗教的休日です。

女性達は、魔法使いや、小妖精や、地の精たちが穏やかに入浴し、供物を楽しまれる伝統が挙げられているかを確かめながらサウナを加熱しました。

真夏のサウナは、若い少女達によって好評でした。それは、彼女らが自らの将来の夫について予言を知りえる場所でした。樺の“ウイスク＝ヴィヒタ”を屋根に放り投げ、そして、その端が指した方向が将来の花婿が来る方角を示しました。魔法使い或いは魔女は、9つの木の小枝でできている“ヴィヒタ”を使いながら、未結婚の少女を入浴させて、彼女に3つの泉から汲んだ水でシャワーをさせ、手桶の結婚指輪で身を守りました。

“ウイスク＝ヴィヒタ”は通常樺の木で作られ、揺りかごから墓場までの神秘的な風習に於いて私たちの生涯の一部でした。“ヴィヒタ”は、私達のサウナ文化で中心的な役割を常に担いました。

火と友達であり、サウナストーブの石と接触する“ヴィヒタ”は病気の予防、治療あるいは人々の感情に影響を及ぼす多くの呪文に対し適していると知られていました。

サウナは、伝統的な治療者のオールラウンドな洗い場であり仕事場でした。病気や悩み事を、サウナの中でまじないや他の不思議な方法で癒しました。

サウナは病気を治療するための一種の健康センター、産婦人科クリニック、食物を準備するための場所であり、そして勿論、日々の厳しい仕事の後に体を洗うための場所、いろいろな家庭や農業の雑用が行なわれた万能な施設であったため、実用的な理由により重要な場所でした。

第二次世界大戦までフィンランドの女性はサウナ内で出産しました。伝統的なフィンランドの結婚式は、彼女の家族によって結婚に捧げるべく女の子の入浴が伴われました。

女の子は、彼女の夫のところにどのような異なった生活が待ち受けているのか、そして、義母の炯眼の下

どのようなことが存在するかを授かりました。

またサウナは葬儀にも関連しました。最初と最後の航海(生まれてから死ぬまで)は、サウナの入り口から始まりました。

フィンランド文学には多くのサウナに関する記述があります。しかし、カレワラ(フィンランドの国家叙事詩)はサウナと入浴の説明を標準化しました。

カレワラの英雄とヒロインのほとんどは自分のサウナを所有していました。聖母マリアにサウナで救いを求めた中世にまでさかのぼると、多くの呪文があります。

聖母マリアは、サウナの精霊または女神“アウトレタル”としばしば混同されました。

彼女は、サウナの強力な力と重要性を象徴しました。フィンランド語のアウトアールは、空中で浮いている“もや、霧”を意味します。当然、アウトレタルは本来、魂、呼吸、活力を意味するサウナの蒸気“ロウリュ”を意味します。

今日、女性の役割は顕著に変わっています。そして、休暇用の別荘の薪燃焼式サウナと同様に、田園地方のサウナの加熱は、ほとんど全く男性の領域になりました。

現代の女性はそれぞれ異なる機会に女性用サウナを楽しみます。彼女達はリラックスした楽しいサウナを満喫したり、ジョギングの後サウナに入浴したりし、若い女性達は女性の友人の為に伝統的なブライダル・サウナをオーガナイズしたりします。

人々がサウナに求めるものは、幸福と快適さです。

疑いなく、母の子宮の中のように、その暖く、暗いが安全な中に身を置き、完全にサウナの神秘的な抱擁に自らを捧げる人々は、より深い平穏な心に達するのです。

サウナは、とりわけ、リラックスし、元気を回復するための場所です。加えて、完璧なサウナ体験は、外界の混乱・騒乱からの解放を要し、フィンランド人が“サウナ・ピース(平穏)”と呼ぶゆうゆうとした歩みです。サウナ入浴は、常にフィンランドの生活様式の一部でした。それでも、私達はその伝統を世界の他の国に喜んで伝えたい。私達は、サウナが世界的な文化遺産になることに喜んで賛同します。

※ 1 定義は様々であるが風呂一般を指す。

※ 2 古代ローマの風呂ではバルネアとテルマエの二種類があり、バルネアの大型で公共的な特殊なものがテルマエ。



1



3



2



4

- 1…フィンランドサウナ協会のサウナ外観。
薪焚き式、電気式等4種類位のサウナ室がある。
- 2…バケツの水に浸してあるヴィヒタ。
- 3…左は石に水をかける時ストーブの上蓋を開け閉めするもの。右はヒシャク。
- 4…薪焚きストーブの焚き口。
- 5…サウナから湖に入る栈橋から見る夕日。
- 6…右にサウナの一部と栈橋。
- 7…樹木にかくれているが湖畔のサウナ。
- 8/9…氷の湖に降りる階段。
- 10…水を入れ、その中にヴィヒタを浸してサウナ室に持ち込む手桶。
- 11…夜の雪景色のヴェランダ。



5



8



6



9



10



7



11